

## 2014年度特別研究期間 研究成果概要

所属・職・氏名： 人間福祉学部・教授・藤井 美和

研究課題：QOL・スピリチュアリティ研究の統合と死生学研究の総括

研究期間：2014年4月1日～2015年3月31日

研究成果概要（日本文（全角）の場合は2,000字程度）

2014年度の特別研究期間の課題は、これまでの研究を総括し、①単著として出版すること、②現在死生学において最も注目される分野である「スピリチュアリティ」についての最先端の研究を翻訳（監訳）すること、③死生学における子どもの分野として、子どもホスピスに関する本を企画し出版（編著）すること④ディアユニアプログラムの開発（キリスト教基盤とした援助職者の育成プログラム）の構築を目的とした。以下それぞれの目的についてその成果の概要を述べる。

### ① 単著出版

死生学とQOLについての単著「死生学とQOL」を、2015年2月20日に関西学院大学出版会から研究叢書として出版した。

死生学は、様々な学問を援用し、いかに生きるかというQOLの問いに応答する学際学問であるといえる。しかしながら、死生学が具体的にどのような学問領域をもち、いのちの課題にどのようにアプローチするかについて体系的な論を示すものは未だ見当たらない。単著出版においては、まず死生学とは何かを概観し、いのちの課題にどのようにアプローチするかについて、ミクロ、メゾ、マクロの視点、1, 2, 3人称の視点から整理した。また、いのちについて議論する際、その価値観の中心となるスピリチュアリティについて、これまでの議論を整理し、既存の理論の中からスピリチュアリティを示唆するものを取り上げてその妥当性を論じた。次に、スピリチュアリティ・実存的領域における人間の痛み（スピリチュアルペイン）について分析し、それが人間の根源的痛み（生きる意味の喪失、関係性を存在の根拠とすることができない痛み）について議論した。さらに、QOLがスピリチュアリティをその中心に据えてきた経緯について尺度の構成概念研究（信頼性・妥当性の検証）からレビューを行い、これまで構築されてこなかったQOLの理論モデルを提唱した。さらに、ガン患者を対象として共分散構造分析を用い、その理論モデルの妥当性を実証した。その結果、ガン患者の全体的QOLに最も大きな直接的な効果を与えていた領域が、実存的領域（スピリチュアリティ）であること、また、全体的QOLの総合効果において、身体的領域、心理的領域、社会的領域より、実存的領域が大きな影響を与えていることが明らかとなった。最後に、理論構築とその実証研究から、苦しむ人、スピリチュアルペインをもつ人への援助の本質を議論した。人間の根源的領域の苦しみは、何かの援助によって解決するのではなく、苦しむ人本人がそこに意味を見出していくこと、関係性を見出していくことによって痛みから解放される。したがって、スピリチュアルペインをもつ人に対するスピリチュアルケアとは、アセスメントや援助によって人を助けることや支援することではなく、関わるもの自身が自分の価値観を問われ、無力であることを了解しつつ、なおその人の傍らにあらうとする態度であることにある。専門職者は、何かができるこ

とによって自己存在の意味を見出していく。そのプロセスは、苦しむ人を「援助する対象」とするものであるが、実はそれが、助けられる人に「あなたは支援されなければならない存在である」というメッセージを送ることになっている。専門職者が「何かできること」を目的とした途端、被援助者は「無力な存在」であることを突き付けられる。そこには、苦しみの解決は見られない。真の援助は寄り添いであり、それは、何かをすることではなく、寄り添おうとする者が、自ら問われることで可能となる逆説的な性質をもつものであると結論付けた。

#### ②「スピリチュアリティ」についての最先端の研究書の翻訳（監訳）

現在死生学において最も注目される分野である「スピリチュアリティ」についての最先端の研究書であり、アメリカソーシャルワーク大学院の教科書でもある *Spiritual Diversity in Social Work Practice: The Heart of Helping Profession* (Edward R. Canda, Leola D. Furman) (472 ページ) を「ソーシャルワークにおけるスピリチュアリティとは何か・人間の根源性に基づく援助の核心」(ミネルヴァ書房)として中川吉晴・木原活信両氏と共に監訳し(694 ページ)、2014年12月10日に出版した。

#### ③子どものエンド・オブ・ライフケア、子どもホスピスについての出版

子どものいのちについての理解と、子どものエンドオブライフケアについて「輝く子どものいのち」(いのちのことば社)を2015年4月10日に出版予定(3月31日現在印刷中)。

共編著者は、淀川キリスト教病院「ホスピス・こどもホスピス」長・鍋谷まこと氏、元大阪キリスト教短大学長柏木道子氏。構成は(1)子どもの成長と死の認識、子どものスピリチュアルペイン、家族のスピリチュアルペインについての理論的理解(報告者は「子どもの死の理解」の章を担当)、(2)子どもホスピスの目指すもの、がんの子ども治療とケア、(3)子どもを亡くした親の手記、3部構成。子どもが死を意識し、実存的な痛みをもつ存在であること、親がの痛みがどのようなものか、また子どもを亡くした親がその後どのように生きていくかについて実体験(手記)を収録している。

#### ④ディアコニアプログラムの構築

神学部のプログラムとして、ディアコニアプログラムを構築し、Divinity と Social Work を合体させたプログラムを創設した。そのための啓発活動として4月にはゲストスピーカー(20代の末期がん患者)講演会を実施した。2015年4月より、すべての学部、外部一般(科目等履修生)にオープンとしたプログラムを実施することが可能となった。

#### まとめ

特別研究期間の1年間における目的「QOL・スピリチュアリティ研究の統合と死生学研究の総括」は、単著1冊、共監訳1冊、共編著1冊という成果で、ターミナルケア、子どもの Death Education,ディアコニアプログラムの創設(2015年カリキュラム実施)で十分に達成されたと考える。今後はこの研究成果を基に、さらに研究を深めていくことを考える。

研究成果概要は、データは [gakunai@kwansei.ac.jp](mailto:gakunai@kwansei.ac.jp) まで提出してください。